

本廟寺焼亡

ほんびやうじしょうぼう



本廟寺焼亡

ほんみうじやうししやうぼう

井沢元彦

講談社

次の文献・ルポルタージュ等を参考にしました。記して篤く感謝の意を表します。 著者

『新稿 日本仏教思想史』大野達之助 吉川弘文館

『日本仏教思想史』古田紹欽 角川書店

『親鸞』赤松俊秀 吉川弘文館

『歎異抄』増谷文雄 筑摩書房

『真宗聖典』東本願寺出版部編

『浄土三部経』中村元、早島鏡正、紀野一義訳註 岩波書店

『日本を滅ぼす法滅尽経』渡辺照敬 三学出版

『東本願寺の変』上之郷利昭 サイマル出版会

目次

第一章	破戒の章……………	5
第二章	謗法の章……………	24
第三章	邪輪の章……………	73
第四章	涅槃の章……………	130
第五章	五逆の章……………	173
終章	法滅の章……………	210

装帧
辰巳四郎

本廟寺焼亡

この物語はあくまで虚構^{フィクション}であり、最近の事件や
実在する人物あるいは団体とはまったく無関係で
あることを、とくにお断わりしておきます。

第一章 破戒の章

1

京都随一の繁華街四条河原町は、河原町通りと四条通りが交差するところで、阪急河原町駅がありデパート・商店・飲食店などが軒を並べている。ここから少し東へ向うと、木屋町の歓楽街に出る。京都一の高級バーと言われている「バラダイス」は、その木屋町の一角にあった。

この三流キャバレーのような名前は、経営者のセンスのせいではない。その実質上のパトロンで最高の得意客でもある男が、市内のある寺の子息であったことから、そのような名前になったのだ。

その寺とは、浄土真宗黒谷派総本山、黒谷山本願寺。その男とは、黒谷派の総帥黒谷妙寿上人の四男妙良であった。

妙寿上人は教王とも呼ばれ、黒谷派では至高至尊の存在である。なぜなら妙寿上人は、浄土真宗の

開祖親鸞聖人の血脈をひく子孫であり、同時に法統も継いでいるからだ。信徒にとっては、まさに

「生仏」様であり、侵すべからざる信仰の対象である。彼は黒谷派信徒にとっては、ヴァチカンの法王以上の存在である。法王が神の代理人なら、教王妙寿上人は仏の代理人、いや、むしろ仏そのものである。

そして妙良はその生仏の子であり、京都の市内いや日本全国でも憚られるような高い身分である。

パラダイスとは、極楽往生をめざす黒谷派の教義にこびて付けられた名前である。すなわち、パラダイス＝極楽というわけだ。

五月初旬のその夜も、妙良は一番奥のボックスで取り巻き連中と酒を飲んでいた。

「なあ、もう飲まへんのか」

と妙良は隣りに座っている黒谷派信徒総代岩田専二にグラスをつきつけた。

岩田は市内の五条御前通りに店を構える仏具商である。黒谷派の仏具・僧衣などを扱っている。信徒は全国に何百万人というから、岩田の儲けは莫大なものがある。もし妙良の黒谷派での地位がさらに上がれば、岩田の利益は測りしれない。一種の御用商人のような地位を獲得できるからだ。

頭髮が綺麗に禿げて、有髪を認める黒谷派の坊主より坊主らしい岩田は、すでに六十を過ぎていた。しかし、二十近く年下の妙良に対し、卑屈なほどにべこべこと頭を下げた。妙良はグレイの派手なチェックの背広に、アスコットタイを首に巻いていた。もちろん彼も教王の子として得度の儀式を済ませ、形式的には僧侶となった筈だが、黒谷派では昔から戒律らしい戒律がなく、髪をおろすということもないので、妙良はまったく僧にはみえない。むしろ酒に溺れたその姿は、ヤクザと呼んで

もさしつかえない程だった。ただ妙良の顔には、わずかながら高貴な家系が伝える気品のようなものが残っており、それが救いといえは救いだつた。

「若様、きょうはとことん行きましょう」

そう言ったのは総本山本廟寺の執事長能勢徹山である。彼は黒谷派の総本山の宗祖親鸞聖人の分骨が祀られている本廟寺で、教王一家の世話や雑務一切をとりしきる役職にいた。

能勢は酒好きだつた。五十七という年齢にはまず見えない精悍な体付き、通りのいい声、つやつやとした肌、それらすべてが能吏中の能吏という印象を人に与え、その印象通りの男だつた。

妙良、岩田、能勢の三人は、現教王妙寿上人のお氣に入りである。特に妙良は教王夫妻晩年の子であるためか、夫妻の愛情を独占している。次期教王は本来なら、御法嗣様ごほうしと呼ばれる長男妙法が継ぐべきであるが、どうやら教王夫妻は妙良に継がせたいらしい——それが京都の仏教界での、もっぱらの噂であつた。

妙良はひとしきりウィスキーをあおると、顔に下卑た笑いを浮かべ右手で内ポケットをさぐって一枚の紙片を取りだした。

「どうや、これなんやと思う？」

妙良は紙片の端をつまんでヒラヒラさせてみせた。まわりを取り囲んだホステスが盛んに不思議がつてみせる。

「一億円の小切手や、どうや、ええやろ」

一億円の小切手と聞いたとたん、まわりのホステスはキャーと嬌声をあげ、妙良にとびついた。首根っ子にかじりついた年増ホステスもいる。

その紙片には確かに¥100,000,000と九桁の数字が並んでいた。

「これ、ほんまの小切手？」

赤いカクテルドレスのホステスが甘えるように訊いた。妙良はニヤニヤ笑って答えない。

脇でお愛想笑いをしていた岩田は、それが宗門の建物の一部を担保に金融業者から借りた本物であることを知っていた。

「さあ、一曲いくか」

小切手騒ぎが収まると、妙良は酔いでよろめきながら立ち上がった。

「待ってました、若様」

と、すかさず能勢が声をかけた。数人のホステスが、カラオケのセットの準備をする。

能勢は準備ができると、まずマイクを受け取り、

「それでは、次期本願寺教王、黒谷妙良さまがお歌になります」

と直立不動の姿勢で顔だけは下卑た笑いを浮かべて紹介した。

妙良は声を張り上げて演歌を唄い始めた。

それほど下手ではなかったが、うまくもない。それでも取り巻きの能勢やホステスたちは拍手で囃したてた。

「なんや、あれは？」

入口近くのボックスで飲んでいた商店主風の男が呆れ声で言った。

「本願寺の若旦那じゃ。ここのパトロンなんや」

と連れの男が低い声で言った。

「本願寺のアホぼんか、気楽なもんやな」

「滅多なこととは言わんほうがええで。ここは大阪と違う、京都や。本願寺言うたら、知事はんでも遠

慮するところや。皇室とは縁続きやさかいに」

と連れの男がたしなめた。

これは事実である。本願寺現教王の夫人彰子は明治天皇の親戚にあたる。したがって、現在の皇室とも一部で血がつながっているわけだ。教王夫人を、信徒は御本所様ごほんじょさまと呼んで奉っている。それもひとつは、その血の高貴さゆえである。

妙良はたて続けに三曲ほど唄うと、マイクを放り出し、

「喉が乾いた——」

と言った。

ちょうどウィスキーのボトルが空になったので、能勢は新しいボトルを出すように命じた。ウィスキーは妙良の好みで「ザ・グレンリベット」というスコッチである。

「よしよし、貸してみ」

と妙良は自ら栓をひねって封を切った。

「お作りします」

とホステスの一人が妙良からボトルを受け取り、グラスに封を切ったばかりのスコッチを注ぎ水と水で割った。

妙良は自分のグラスだけ先に受け取ると、他の人の分が出来あがるのも待たずにぐいっとあおった。

妙良の表情が変わったのは、その直後だった。何とも形容しがたいような獣じみた叫び声をあげた妙良は、そのまま前に崩れ落ちた。

慌てた能勢や岩田が妙良を抱き起こしたが、妙良は既に白目をむいて死んでいた。

ホステスが金切り声をあげ、室内は騒然となった。

2

京都府警本部は京都市の真ん中の上京区新町下立売角にある。堀川通りと烏丸通りにはさまれ下立売通りに面しているのである。北東側には御所があり、南西側には二条城がある。

その日、京都府警捜査一課の捜査主任惟住警部補は書類の整理で居残っていた。殺人事件発生の一報が入ったのは、午後九時少し前だった。

惟住警部補は顔をしかめた。

被害者がまずい、本廟寺の四男である。

古い伝統を持つ京都では、昔から寺社がらみの事件は面倒なことになることが多い。ましてや、信徒も多く、生きた教団として活動している本廟寺である、事件の根は相当に深いという予感がした。

惟住警部補は出動する前に、道路を隔てて北側にある京都地検へ事件発生を報告する電話を入れた。当直の検事が出た。検事は既に所轄署から報告を受けて、事件の発生を知っていた。

「――何しろ御皇室とも縁続きの由緒のあるところだ。捜査の進め方には充分配慮をし、慎重にことを成すように」

検事の注意を聞きながら、警部補はますます気分が重くなっていくのを感じていた。

「どんな具合や？」

現場のバー「パラダイス」に到着した惟住警部補は、先着していた所轄きょうこくの京極署の捜査係長阪倉警部補に訊いた。阪倉とは何度も仕事をすることがあり顔なじみだった。

「毒殺やな」

と阪倉は事件の状況を説明した。

「ボトルに青酸カリが仕込んであったようすな。最初に飲んだ被害者がやられた——」

「ボトルは封を切ったとこやて言うやないか。毒はどうやって入れた？」

「封を一度切って、青酸カリを入れたあと、もう一度つなぎ合わせたみたいですな。見ますか——」
と阪倉は鑑識課員にボトルを持ってこさせた。もっとも封を切ったあとなので、つなぎ合わせた跡はよくわからなかった。

ラベルには「The GLENLIVET」と書いてある。

「かなり的高级ウィスキーらしいです」

と阪倉が先回りして説明した。

惟住はこの銘柄を知らなかった。

「このボトル、被害者のところへ出た人は偶然か？」

惟住はもっとも肝心な点を質問した。このウィスキーが店で一般客にも出しているものなら、犯人は黒谷妙良を狙ったとは言いにいくくなる。誰がそれを飲むかは特定できなくなるからだ。

「このスコッチは被害者専用やったようすな」

阪倉は言った。この酒は普通の客には出さないで、妙良だけがボトルキープできることになってた。もともと、この酒自体、妙良が一ダースまとめて持ち込んだものだという。妙良はこの酒が気に入りで、いつもまとめ買いをし、店に持ち込んでいたということであった。

惟住はちよつと考えてみた。犯人はやはり妙良を狙ったのだろうか。もし、そうだとすると、毒はどこで混入されたのか？ 妙良がボトルを店に持ち込む前か、それとも店がそれを保管している間の出来事か？

「そっからやな」

惟住はそつと呟いた。

入口の方が少しざわついた。

年老いた男と女が中に入ってきた。

惟住はその顔に見覚えがあった。何度かテレビのニュースで見たことがある。真宗黒谷派の教王黒谷妙寿と夫人の彰子である。二人とも七十歳を越えている筈だが、艶々とした顔の色はとも年には見えない。

「良ちゃん、なんでこんなことに」

悲鳴のような声をあげて、妙良の死体にとりすがったのは夫人の方だった。皺だらけながら品のいい、血の高貴さを感じさせる顔だが、どこか陰がある。夫人は室内に轟きわたるような大声で泣きわめいた。教王の妙寿上人は少し離れたところで、死体にとりすがって泣く夫人を茫然と見おろしている。

しばらく泣き続けた夫人は涙を拭くと、気を取り直したように立ち上がり、惟住たちの方へつかつ

かと歩み寄った。

「あなたらが、ちゃんと仕事をしいひんから、こういう事件が起こるんや」

夫人は惟住と飯倉に向つて金切り声で、そう決めつけた。

目を白黒させている二人に、夫人はさらに追い打ちをかけるように、

「早く犯人をつかまえなさい。何を愚図愚図してるんや」

と怒鳴りつけた。

「――犯人のお心当りがありますか？」

と惟住は怒りを押さえて訊き返した。

「同行衆どうぎょうしゅうの連中や。島谷が糸を引いているのに決っている」

夫人は怒りに身を震わせながら、はっきりと云った。

4

村井記念美術館は東京港区南青山にある。

財界の大物だった故村井国明のコレクションを陳列した美術館で、一般的にはあまり有名ではないが、特に仏教系美術の収蔵品の優秀さには定評があった。東京で国宝の仏像を展示している美術館といえは、ここと赤坂葵町の大倉集古館だけである。

南条圭なんじょうけいは時々散歩がてらに村井美術館をのぞくことにしていた。彼は歩いて十分ほどの原宿駅近くで古美術商を営んでいる。といっても、まだ四十は越えていない。

筋の通った高い鼻梁、透き通るような茶色の瞳、何よりも頭髮が三分の一ほど輝くような銀髪に変

わってしまっている。そのためか、初対面の人間は、まず彼を外国人との混血とまちがえるのが常だった。外国暮らしは長かった。パリに五年、ロンドンに三年、アメリカにもいたことがある。今は趣味が八割、実益が二割の古美術商として気盛な人生をおくっている。

美術館に入った南条は、まっすぐに館長室に向った。そこには恩師の久松がいる。南条は日本では美術史学を大学で学んだ。久松はその時、美術史学教室の主任教授だった。事情があつて大学を辞職し、いまはこの美術館の館長を務めている。

ドアをノックして館長室に入ると、久松はデスクに向つていた。

「やあ、君か——」

と久松は振り返った。顔に微笑が浮かんだ。

「ごきげんいかがですか」

南条も挨拶を返した。ふと見ると、デスクの上には古い日本画が置かれてある。

南条は歩み寄つて、それをのぞき込んだ。

「さすがに目が早いな」

久松が笑った。

それは地獄草紙だった。

死後、現世で罪を犯した人間が落ち込むという地獄の情景を、極彩色であらわした絵巻物である。ちょうど地獄の鬼が刃物で亡者を切り刻んでいる構図が上向きになっていた。

「鎌倉の初期ぐらいですかね」

「そうだね。なかなかの逸品だろう」

久松の言葉に南条は頷いた。作者名はわからないが、異様な迫力のある見事な筆致だった。